

# 阪神間女子中高生のファッション行動にみる差異化戦略

## ファミリアのバッグを例に

佐藤八寿子 (神戸ファッション造形大学)

### 0. はじめに

薄手のデニム地に動植物などのフェルトのアップリケ——ファミリアのバッグだ。阪神間地域ではこのバッグを手にした女子中高生の制服姿が頻繁に見うけられる。登下校時用のサブ・バッグとして、彼女たちはその幼児用の布製手提げ袋を愛用している。多くの生徒が揃って持っているため、部外者からは学校制定品と思われることもあるが、そうではない。むしろ校則に反してまでこのバッグを持つ生徒は少なくない。しかも、複数の学校の生徒たちが、自由意志で、しかし申し合わせたようにこのバッグを持っている。阪神間だけではなく、大阪、京都でもこのバッグをもつ女子生徒が散見される。

なぜ、彼女たちはこのバッグを持つのだろうか。「ファミリアのバッグを持つ‘お嬢さん’たちには、‘育ちのよさ’が感じられる」と、神戸のある女性は言う。外部の人間が見ればただの幼児用布袋に、一体どのような社会的意味が付与されているのだろうか。

### 1. 阪神間地域の歴史的特徴

このバッグが女子中高生に愛用されている地域について確認しておこう。

阪神間は、明治以来、独自のハイ・カルチャーを育んできた地域である。舶来の風俗文化がいち早くもたらされた港神戸と、近代において急激な発展をとげた商都大阪を結ぶこの地域には、富裕層が多く居を構え、阪急等の私鉄資本の郊外開発によって大正期以降は新興サラリーマン階層、知識人芸術家も移住し、文化娯楽施設の整ったモダンな「阪神間文化圏」が形成されていった。たとえば、芦屋を代表とするこの地域が、日本のファッションをリードする重要な地位をしめることは、今日でも変わっていない。1998年頃ファッション雑誌に「シロガネーゼ」「アシヤレーヌ」という語が登場したが、これはファッション・リーダーとも言えるべき富裕専業主婦をその居住地名（白金、芦屋）になぞらえて呼んだものだった。

教育機関についても、神戸在住外国人の関係するミッション・スクールをはじめ多くの私立学校および大学が、富裕層中流層居住地域を中心に建てられた。その中には、日本有数の進学校として知られる灘校が存在する一方、偏差値とは別に、

いわゆる「おしゃれな」学校として人気の高い私立学校も少なくない。たとえばファッション誌『JJ』（1975年創刊）では、彼女たち女子大生が「読者モデル」として、在籍大学名とともに、ほぼ毎号誌面をかざっている。

阪神間に生まれ育ち、阪神間で就学することは、そうした文化、教育、ファッション環境に生まれ育ち、就学することを意味している。

### 2. 子供服の「ファミリア」

阪神間を代表する企業のひとつがファミリア社だ。創業者の坂野惇子は、結婚後「外人村」と呼ばれる神戸岡本に居を構え、欧米式の育児知識を学んだ。「良心的で感覚の良いベビー子供用品の製造と販売」という、ファミリアの創業精神はそこから生まれたという。戦後、父親が手放した軽井沢の別荘に置いてあった荷物の中から、娘時代に集めたフランス製の刺繍糸や英国製の毛糸、刺繍用の布地、手芸材料などをもとに、自宅で週一回の稽古を始め、1948年には前身であるベビーショップ・モトヤを開店させ、1950年、株式会社ファミリアを神戸市生田区三宮町に設立した。

1960年、皇太子徳仁親王誕生に際し、ファミリアのベビー用品が納められた。ひきつづき、秋篠宮文仁親王、紀宮清子内親王誕生の際にも納品の栄に浴したファミリアは「皇室御用達」ブランドとしてその名を高めた。最近では、敬宮愛子内親王がファミリアを着用されており、「皇室御用達」ブランドとしての輝きは依然衰えていない。

ファミリアの製品は、合理的でシンプルなデザイン性、パステルカラーを主とした上品なテイストで、根強い人気を獲得している。特に、出産祝いの贈答、また昨今では小学校の「お受験」用品のブランドとして定評がある。「お受験・面接」にふさわしい子供用スーツから、ハンカチ、うわばき、シューズケース等の小物類まで、一通り揃えることができ、シーズンともなれば各店舗では予約販売が開始される。

### 3. 阪神間女子中高生の定番として

ファミリアは子供服のブランドであり、阪神間の中高女子生徒が愛用しているバッグ（商品名デニムバッグ）も、園児対象に開発されたものである。32×43cmのサイズの綿バッグにはアップリ

ケがついており、底と持ち手部分は合成皮革で補強されている。色は通常店舗には紺と赤が置いてあるが、黒、緑などもある。ピアノのテキストであるバイエルを入れるのにちょうどよい大きさだったことから、「バイエル・バッグ」、「レッスン・バッグ」とも呼ばれていた。

それを、なぜ中高女子生徒たちはサブ・バッグとして使い始めたのだろうか。

第一に、軽くて丈夫という点が、通学時のサブ・バッグとしての条件を満たしている。

第二に、一部、登下校時に所持してよいサブ・バッグについて色のみ指定している学校があり、紺色のファミリアのものはその条件を満たした、ということも、指摘できよう。

第三に、私立学校の中には制服がファミリア社製であるところがある。サブ・バッグも自然に「お揃い」にした、という可能性もあるだろう。

しかし、これらの要素はいずれも十分条件ではあるが、必要条件ではない。ファミリアのバッグ以外にも紺色で軽くて丈夫なサブ・バッグに適したバッグはいくらでも存在するし、ファミリア社製制服ではない学校生徒も、ファミリアのバッグを持っているからだ。

#### 4. ファミリアのバッグの価値

ここで、さらにこのバッグについていくつかの要素を指摘しておきたい。

一つ目は価格である。現在店頭および通信販売で入手することのできるこの「デニム・バッグ」は、8500円（税抜本体価格）である。これは、たとえば、生地店店頭などでよく吊るして販売されている同型同サイズのキルティング等の布バッグ（幼児のお稽古用）が1000円以下で入手可能であること、あるいは同じくベビー洋品ブランドとして有名な「ミキハウス」の同型同サイズの「レッスン・バッグ」が1500円であることと比べても、相当高価といわざるを得ない。

ファミリア社によれば、この価格は「国産・てづくり」にこだわった故であるという。確かに、ほのぼのとしたアップリケは手作業ならではの味わいのものであるし、持ち手、底布等は、長年の重量使用に耐えるべく非常に丁寧に縫製されている。しかも、破れるほつれる等の破損があった場合は修繕もメーカーが引き受けている。幼児用布袋に、これほどの良心とこだわりをもって製造している会社は稀である。安価で粗悪な外国製が市場を席卷する中、信頼もてる国産品ならではの品質の高さは大きな価値と言えよう。

第二に、この「デニム・バッグ」には、実は様々な種類が存在している。まず、毎年春と秋に新作

が発表される。ちなみに2008年のテーマは「動物たち」で、「ワンちゃん」「クマさん」などが幼児とともにアップリケで配された「秋冬コレクション」数種類が現在発売中である。さらに、それら通常店頭通販で入手できる一般のバージョンのものとは別に、販売時期場所「限定」の特別バージョンも存在する。黒、緑などの布地のものは限定バージョンに登場する。つまり、ひとくちにファミリアのバッグといっても、色やアップリケの絵柄には様々な種類がある。そうしたバッグを複数枚所持し、色や絵柄によって、夏用冬用と使い分ける女子中高生も存在する。特に「限定品」はシリアル・ナンバーが入った希少性の高いもので、販売時には長蛇の行列ができることも稀ではないという。当然ながら、価格も通常品の倍ほどする。シリアル・ナンバーの入ったバッグを入手するために行列をつくる購入者の一体何割が、それを幼い園児に使わせるだろうか。その価値が自分で実際に理解できる女子中高生の手にとる枚数は、決して少なくないに違いない。

#### 5. 暫定的まとめ―「差異化」と「再生産」

以上のことからわかるのは、第一に、ファミリアのバッグをもつことが、阪神間の女子中高生においては、意識的無意識にかかわらず、ある種のステイタスになっているという事実だ。それはしかし、部外者の目には直接見えない、地域的、学校文化集団において閉じた、「密教的」な（わかる人にしかわからない）共通理解の上に成立するものである。であればこそ、一目瞭然の単純な「差異」より一層価値が高いと言ってよかろう。

第二に、彼女たちのファミリアのバッグの背後に親や祖父母の存在があるということである。8500円のバッグを、全ての中高生が独力で入手しているとは考えにくい。布製の袋にそれだけの代金を支払い、実際に行列に並んでいるのは誰か。上記「育ちのよさ」発言の女性は、まさに女子中高生の親世代である。彼女たち世代は、すでに自分自身の中学高校在学当時、ファミリアのバッグを愛用していた。「皇室御用達」であることを同時代で体験していたのもまた親世代である。通学時にファミリアのバッグをもつという独特の文化は、間違いなく親世代から相続されたものであり、この典型的「親ウケ」アイテムを持つことが、すなわち「お嬢さん」としての「育ちのよさ」を演出していることにもなるというわけだ。

以上をもとに今後さらにリサーチを進めたい。

<以上>

【参考文献】『ファミリア 50年のあゆみ』2000年、株式会社ファミリア発行、等